

大橋完太郎氏の博士論文『群れと変容の哲学—ドニ・ディドロの唯物論的一元論とその展開—』は、18世紀フランスの啓蒙思想家ドニ・ディドロの哲学の展開を実践という独自の観点から統一的に読み解いた論文である。序文に続く本論は5部構成で、第5部以外はすべて3章と結論からなるので全体では14章、それに加えて結論と20頁に及ぶ補論が付されている。文獻目録まで含めて228頁の大作である。

第1部は「弁証法の手前側」と題されているが、ディドロの『ラモーの甥』を採り上げて、その意義を近代において決定づけたとも言うべきヘーゲルの『精神現象学』の記述を批判的に再検討しながら、ヘーゲルが読み落としたディドロの問題系を、身体性のうちに見出す議論が展開されている。これは、大橋氏の本論文執筆の基本的な構えが、ヘーゲル的近代によるディドロの位置づけに対抗し、その歴史的な通説から、現代にも通じうるディドロ哲学の可能性を〈救い出す〉ことにあること、そしてその可能性が物質的な身体性のうちに探求されることを明確に示している。

第2部「抽象と形象」では、『盲人書簡』と『聾啞者書簡』という二つのテキストを対象にして、ディドロの感覚論が分析される。ここでは、盲人・聾啞者といったひとつの感覚を欠如させた存在の分析を通して、世界の連続的な生成の運動というディドロの唯物論的一元論の根幹をなす思想の成立が緻密に跡づけられている。また、そこから出発して、異なった感覚の協働や共存という困難な問題がヒエログリフやエンブレムという特異な概念によって乗り越えられることも、これらの概念の歴史的な時代背景も含めて、詳細に論じられている。

第3部「表象と実在」では、一元的で連続的な現実とその記述との関係を『百科全書』、さらには『1767年のサロン』における絵画の記述などを通して論究するものである。そこではディドロが考えた「百科全書」が、ミシェル・フーコーが古典主義時代の辞書理念として見出したスタティックなタブロー（分類・表）理念からは逸脱したダイナミックな運動体であったことが証される。また、かれの絵画評においても、そこでの問題が、絵画表象のなかに「歩く」という運動を持ちこみ、それを現実として生成させるものであることが論じられ、記述や表象の根源的な媒介性が浮かびあがらせられている。なお、この第3部においては、ディドロの啓蒙思想の実践的な手続きを解明するために、ディドロが執筆した『百科全書』の「中国人（の哲学）」の項目を比較哲学的見地から分析検討する一章が組み込まれている。

第4部「化学的思考と物質論」は、初期の『自然の解釈に関する思索』から『物質と運動に関する哲学的原理』にいたるディドロの物質的世界観の展開を、同時代の化学的思考の布置のなかに位置づけつつ、その独自性を論じたものである。これによってディドロがいかにか同時代の化学から影響を受けてみずからの唯物論的一元論を構築していったのかがはっきりと展望できる。しかもディドロが物質相互に働く力として独自に提示した「傾向性 nisus」という概念の重要性が指摘されている。

第5部「一般性と怪物性」は、これまでの論述を受けて、『ダランベールの夢』を分析しつ

つ、ディドロの唯物論的一元論から帰結する怪物的な存在論の世界とそこにおける道徳の問題が論じられる。ディドロの思想においては、最終的には、すべての存在者、またその形態は、超越的に与えられた形相によるのではなく、異質なものの偶発的な集合、つまり「群れ」となることが示される。これは、通説となっている啓蒙思想の哲学にはもはや還元できない過激な哲学である。論文提出者は、これまでの論述を通してついにディドロ哲学の新しい解釈へと辿り着く。だが、もしそうだとすれば、この唯物論的一元論はいかなる実践的な道徳を提起するのか——この最後の問いに、大橋氏はディドロの『生理学要綱』における道徳の問題の記述を手がかりにそれを「変容の道徳」として解明しようとするのである。

以上、ディドロ哲学の読み直しという壮大な意図のもとに、一方では18世紀同時代の時代背景の細部にまで及ぶ調査、他方では、ディドロのテキストそのものの随所に独自性が発揮された綿密な読解、その二つの柱をもとに新しいディドロ像を打ち立てた力作である。構想の大きさだけではなく、第1部のパントマイム、第2部のヒエログリフとエンブレム、第3部のタブロー、第4部の「傾向性 nisus」、第5部の怪物などそれぞれの問題設定が結晶した特異点を打ち出すことで、論述に鮮やかなエコノミーを与えていることは強調しておくべきだろう。

審査委員からは、たとえば第3部の「中国人（の哲学）」の分析など、かならずしも全体の論述の進行には必要ではない過剰な記述の箇所があるのではないか、あるいは哲学的思考の読み取りが先行してディドロの個々の作品の文学性への考慮が足りないのではないか、また道徳を論じた最後の部分をもっと膨らませるべきではないか、などの指摘もあったが、どれも本論文に対するきわめて高い評価の上でのコメントであった。ディドロ研究の国際的な状況に通じている審査員のひとり「世界的にもここ2、30年これほど総合的なスケールのディドロ研究はない」と述べて、仏語での出版を強く求めたことを付記しておきたい。

以上により、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。